

篠原出羽守 一 孝
 山崎長門守 長 口
 横山大膳職 長 知
 巨海齋宗 半

一、今枝彌八郎敵合の様子を測る事

天正十二年長湫陣の時、信雄の臣今枝彌八郎、神子田八右衛門に向て云ふ。我弱年にして敵合の様子を不知、貴殿は度々の武功なれば、今日我等を召連れ敵合の様子を示し給へと云ふ。神子田賢くも能圖を宜ふもの哉。はや我等に同道し給へとて、只二騎にて池田勝入の先へ近々と乗懸る。彌八郎指物は淺黄の一幅の二間あるにて、双軍へ目にかゝる。勝入見て、何者なれば身共の先へ近づくと、慮外もの、あれ打落せよと日置伊右衛門へ被申付。彌八郎は伊右衛門爲にをひなれば指物も見知、不便ながら鐵炮三十挺ひしと打之。神子田云。彌八鐵炮に癖ひ給ふな、あたらぬものぞあたらぬものぞといひく馬を乗廻しす。彌八郎も神子田がする如くする内に、一番薬を打拂ひ二番薬をこむ。神子田いふ。か様の所に長居はせぬものぞ、我等に任せて

あげ給へとて、輪を乗て引擧る。伊右衛門一の薬を打拂ひ、煙の内に二の薬を込む。烟散じて見れば、二騎は遙々と行延たり。今枝彌八郎は宗仁わか名也。

一、淺井暖長家戦死の人々

淺井暖の時長如菴が巨戦死五人。長右衛門・堀内意周・八田喜右衛門・小林平左衛門・鹿島地六左衛門也。
 一、淺井左馬・團七兵衛追放を被命
 慶長年中の末、於高岡淺井左馬方、神尾圖書方とて御家中二つに分る。櫻井某といふ浪人、初は左馬方を頼て御家を望む。然るに圖書出頭はつよきとて、左馬を捨て圖書方に成る。士の風俗を取失ふと左馬方の者共憎之。或時左馬馬をのらせ見物し居たる所へ來懸り、本より無言ゆゑに高あしだのまゝにて通る。團七兵衛も其所にあり、是非成敗すべしとて、其夜圖書方より櫻井草履取一人にて歸るを、先づ左馬斬之。二の太刀七兵衛にて難なく切殺しぬ。翌日櫻井をば左馬・七兵衛兩人にて切殺といふ事、高岡中に隠れなし。時に櫻井が宿は左馬下屋敷の近所なり。下屋敷に有之女の首を切て、町端に懸たり。瑞龍公御鷹野に御出にて、彼女の首

を御覽候て、如何の儀と御尋也。水原左衛門御駕の脇に居て、前後の首尾有の儘に申上る。左馬儀故なく櫻井を殺せし故に、家來の女房と不作法の儀有之に付成敗仕体に事を寄申候。無罪の女迄も殺し不便成事に御座候と申上る。水原は神尾と知普也。公甚だ怒給ふ。左馬に切腹可被仰付に極る。左馬宅中に引籠る。前田美作・長田牛助・團七兵衛、其外許多く籠る。今押寄るくと相待てども、二日二夜別條なし。於是牛助云は、餘人は兎も角も、美作殿是に御入候儀は勿体なし。只今にも寄來らば、此に有合もの共一人も遁れまじ。左候は彌大成左馬が誤りにも成べし。未寄以前に左馬切腹いたされよ、我等介錯すべし。日本の神を以て、其刀にて我等も尤切腹すべしと云ふ。其時美作被申候は、牛助はいな事を被申ものかな。左馬切腹し其方も腹切たらば、神八幡其次は我等腹を切可申候。其上に退たるものは逆も男は成まじければ、一人も退者は有まじ。何も一同し、寄來るものと花やかに一戦し死ぬる迄よと、中々可被罷出体にてなし。満座尤と一同し、彌鎮りて居る。公にも可被遊

て國境迄送りて歸る。扱左馬は藤堂和泉守殿へ奉公し、大坂陣は彼家にて勤めたり。七兵衛は加藤左馬助殿へ奉公せしに、兩人とも後暇をもらひ御家へ歸參せり。櫻井は櫻井嘉辰が父なり。

一、岡山表にて野村左馬・永井左内等の働

慶長二十年五月七日、岡山にて野村左馬働きは、初め黒威しの人と突合て突伏ける所へ、狸々緋の羽織武者來て突合ひ、是をも突伏けるに、敵もかさみ、味方も來りて敵を追立たり。彼黒威の首は永井左内取之。狸々緋は誰取候哉、左馬は先を心掛候故に不存と言上す。然所に丹羽織部、岡山表にて狸々緋の羽織武者と突合突伏て首を取候旨にて、首に羽織を添て上之。岡山にて狸々緋の羽織武者は只一人ならで無之儀は、諸人可存事に候。然れば某狸々緋の羽織武者と突合突伏申事、偽りの様に候間、是非とも此所を御糺し於不被下は堪忍難成候と言上す。微妙公、左馬允申分御聞届被遊候間、其心得可仕よし忝き御意等有之、其分に罷成候。又冬陣の時、永井左内不首尾の事ありて御知行被召放、夏陣の時浪人也。丹羽織部と知香に付同道し、岡山表にて